

価値をそれほど傷つけるものではないであろう。坂本氏の本領は、理論にあるのではなく、個々の具体的事実に関する実証的研究にあるといえる。免除領田制といわれる庄田認定手続きの分析、不堪佃田解文制の推移に関する所論、公田官物率法の成立に関する所論、十一世紀初における律令制の人身把握消滅に関する指摘等、それだけを個別にとりだし実証面だけに限ってみれば、いづれもすぐれた研究である。また、これらの研究中には、補論にみえる鴨御祖社領都宇・竹原両庄に関する研究をも含め、坂本氏によりとりあげられることによって、はじめて詳細に論じられた問題もある。従って、本書は、平安時代の研究者は勿論のこと、中世史の研究者も必ず目を通さなければならぬ書物であるといえる。

なお、坂本説との対比において示した私見については、書評という本稿の性格上、充分意を尽して述べたとはいいがたい。これについては拙著『律令制度崩壊過程の研究』を御参照いただければ幸いである。

(A5判 三六〇頁 一九七二年三月 東京大学出版会 定価二六〇〇円)
 (奈良教育大学助教授)

渡辺 則 文 著

『日本塩業史研究』

河 手 龍 海

戦後の日本塩業は未曾有の変化をとげたが、わけても、千有奈年の長期にわたって、塩浜ないしは塩田を利用する塩業の生産形態、すなわち、揚浜・入浜式塩田の形態が消滅して、イオン交換膜による近代的工場生産への転化がなされたことは、そのこと自体がすでに大変な歴史的事件であったと理解されなければならない。

そのみならず、近代的化学工業への脱皮を期に、明治三十八年以来実施されてきた塩専売そのものも組上りのほり、その継続も大きくゆらいでいる現状である。

このような塩業の大変革は、おのずから塩業史に対する深い関心を高めているといえるが、このような時期にあたって、渡辺則文氏の『日本塩業史研究』が出版されたことは、この道を研究する者にとって、甚だ有意義であるといわなければならない。

同氏は、過去二〇年の長きにわたって塩業史の研究に従事され、

その間、古代・中世に関する諸論文を早くから発表され、ついで近世に関するものを研究されて、日本塩業史の発展に寄与された功勞者である。今般の著書は、これら各分野にわたる諸論文を集大成して出版されたものである。その構成の概要を紹介すると次の通りである。

第Ⅰ部 日本塩業の発達と時代的特質

第一章 古代の塩生産

(第一 藻塩から塩浜へ 第二 塩浜の成立と製塩地 第

三 古代塩生産の特質)

第二章 中世塩業の展開

(第一 若狭湾沿岸の製塩業 第二 瀬戸内の製塩業 第

三 中世塩業の特色)

第三章 近世塩業の基本構造

(第一 入浜塩田の生産構造 第二 塩業労働の発展 第

三 塩業労働者の賃金闘争 補論 塩浜共同体)

第四章 近世における塩の流通

(第一 問題の所在 第二 幕藩社会における塩の流通

補論 信越における塩流通史 第三 瀬戸内塩の流通

機構 第四 結びにかえて 附論 幕末における洋式製塩

法の導入について)

第五章 明治前期の塩業と十州塩田組合の成立

(第一 休浜法についての若干の問題点 第二 明治初年

の休浜同盟 第三 政府の塩業政策と十州塩田組合の成立

第四 井上甚太郎の塩政論と制限法反対運動 第五 十州

塩田組合の動向 第六 東嶺支部の抵抗と休浜同盟の終焉

第七 結語)

第Ⅱ部 製塩地帯の生活と文化

第一章 中世における内海島嶼の生活

(第一 土地所有乃至占有関係 第二 領主制の形成過程

第三 農民層の動向)

第二章 近世塩田都市の社会と文化

(第一 竹原下市の成立 第二 初期町役人の承譜と商人

の台頭 第三 下市の経済的發展 第四 下市と周辺農村

との関係 第五 文化Ⅱ学問の発達)

第三章 近世塩田と背後地農村

(第一 塩田の不況と石炭焚の問題、 第二 石炭と薪の

争い)

第四章 島の塩田と農民生活

(第一 大崎中野村 第二 塩田の開發 第三 塩の販売

第四 石炭問屋差違一件 第五 明治初期の塩業)

附 浜子闘争関係史料

以上の構成で明らかな如く、第Ⅰ部にあっては、古代から明治前期にわたる間の塩業上の時代的特質と問題点を明らかにされ、第Ⅱ部においては塩民層の抛って立つ基盤を立体的に肉付けされている。以下各章の内容を紹介するとともに私見を加え、その責を果したいと思う。

日本塩業史における古代・中世は、残存する史料が甚だ僅少である。とくに古代においてその感を深くする。第一章「古代の塩生産」は、その制約を克服しつつ、古代製塩を明らかにせんとした著者の努力のあとが窺える力作である。

古代製塩の形態として、直煮的製塩から塩田法に移行する前段階に「藻塩焼く法」があるといわれているが、その内容は長く不明確のままであった。同氏は、これを江戸時代のモンタレ(藻垂)の語、宮城県塩釜神社末社の「藻塩焼神事」などから考察され、「海水の濃縮作業と煮沸の二つの工程を、さらに、あるいは焼き塩の工程をも同時に表現したものであり、その場合、藻はもっぱら濃縮工程に利用されたものと推定できる」とし、採かん技術史の面からは浜利用の前段階の技術を示すと推定されている。

このように、同氏は濃縮工程にも藻が使用され、煎熬過程には土器が使用されたとされた。そして、土器煎熬は奈良時代になる

と西日本の各地で消滅し、鉄釜・石釜・土釜にかわり、採かん面も砂浜利用の形式に移行する。また、広大な塩浜と塩木山を占拠し、高価な鉄釜をもって製塩しえたものは中央貴族社寺、ないしは地方豪族であつたろうと推定された。

第二章「中世塩業の展開」においては、若狭、伊予弓削島の塩業関係史料に基づき、揚浜塩田の経営形態を分析され、名主が個々の的に塩浜・塩釜・塩木山を占有する名主的経営形態であることを明らかにされた。そして、中世においては、塩木山(燃料)のウエイトが高く、塩生産の過程において重視されていることから、煎熬部門が中世塩業特質の一端として注目すべきであると強調しておられる。

ところで、古代・中世の製塩業という、まったく未開拓の分野を究明されて、その全貌を明らかにされた功績は高く評価すべきであるが、ここに私見の一、二を述べるならば、考古学的成果を期待する古代において、藻を濃縮に使用したことの確証、また、出土土器が煎熬土器か焼塩土器かの区別などが必要であらうし、「藻塩焼く法」から「塩浜法」に移行する前段階に、「塩浜法」に先行するものといわれる「塩尻法」の採かん法を想定する必要はなからうかなどの諸問題が伏在しているように思われる。現在における日本塩業の生産技術的研究は、同氏が発表された藻塩法、

揚浜式塩田形態、入浜式塩田形態という段階を究明して、より細分化された技術上の研究発表がなされている。これらの研究段階を踏まえた、古代・中世・近世にわたる塩業形態の再検討が必要であろうと思われる。

第三章「近世塩業の基本構造」においては、近世入浜塩田の生産構造をはじめ、経営、労働、流通機構の全般にわたって考察されている。わけでも、近世における塩田の増加は塩価の下落をまねき、宝暦・明和期にいたって遂に塩業危機をまねいた。その打開策として休浜替持法（一種の操短）に端を発する十州塩業者の休浜同盟がなされたが、一方内部にあっては、経営の合理化をめざして、労働者の人員整理である年傭の減少、月切り、日切り雇いの増大がみられる。

このことは、自然に、塩業労働者である「浜子」の相対的地位の上昇の端緒をもたらし、労働者の賃上げ闘争への足がかりをまねく結果になった。同氏は、安芸国竹原塩田における宝暦九（一七五六）年、文政一〇（一八二七）年の浜子闘争を取りあげて、その経過をのべるとともに、塩業労働の特色である奴隷労働に近い雇傭労働条件に封建的束縛を排除して、自由な賃労働化への前提をかたちづくって来たこと、しかし、それは、それ以上への発展に「近代化」は不可能であったとして、塩業労働者の闘争の位

置づけをおこなっておられる。

第四章「近世における塩の流通」は、塩業史において、研究の最もおこなわれている分野である。同氏はこれを三都、山間地帯、日本海沿岸の諸地域に区分され、その流通状況を究明されるとともに、近世の製塩業者による休浜同盟は、塩の流通担当者若干の影響を与えたが、幕藩制的塩流通機構は不動であったと理解されている。

ところで、近世塩業の重要な問題に、塩田増による塩価の下落、この対応策としての休浜同盟の問題がある。ところが、塩価下落も塩生産地の下落で消費地のそれではないという事実がある。その理由は大都市の問題、塩廻船の問題などに関係があるとされているが、各諸地域の塩受問屋・塩生産地問屋の詳細な究明が更に必要であろう。また、幕藩体制下の塩流通機構にあっては、藩営塩専売の実施にあたって、従来の流通ルートをかえて進出せんとした例が赤穂藩の場合などに見られることから、これまた再検討を要する問題であろうと思われる。

第Ⅱ部「製塩地帯の生活と文化」においては、中世における内海島嶼の生活として伊予国弓削島の塩の荘園を舞台に、塩業民の生産形態と領主との関係を分析され、瀬戸内海荘園ないし、それを基盤とする大名領国制成立過程の考察をしておられる。また、

近世では安芸国竹原塩田を対象に、それを運営する町役人・塩商人、さらには周辺農村との経済的連帯性を中心に、塩田都市文化の形態を研究しておられる。

がんらい、産業史の研究は生産機構、流通構造の究明にのみ終始し、それらの有する諸相を統合的に把握する作業をおろそかにする傾向が強かった。その反省として、同氏のおこなった社会・経済・文化の関連において一塩田地域を総合的に把握された究明は甚だ興味深いもので、これに対し贅意を表するものである。

渡辺則文氏の本著は、豊富な資料をもって手がたく打ちたてていった近年まれにみる好著であって、塩業史の研究者はもちろん、広く日本史の研究者に推奨したい論著といえる。

(A5判 三三三頁 一九七一年三月 三二書房 定価二八〇〇円)

(鳥取大学教授・)

谷川道雄著

『隋唐帝国形成史論』

気賀沢保規

五胡十六国時代とそれに続く北朝史は、胡族と漢族の相剋の過程から次の隋唐帝国の根幹を形づくる時代、として位置づけられる。しかし、この錯綜した歴史事象の内面に踏み込み、そこに展開される世界を統一的に把握することは、多くの困難に遭遇せざるを得ない。この困難な課題に精力的に取り組む、五胡・北朝史の研究に新たな地平を拓かれたのが谷川道雄氏であり、本書はその成果を一冊にまとめられたものである。一九五八年から六八年に至る十年間の氏の六朝貴族制社会に関する研究のうち、とくに政治史の領域を扱った十二編の論文が本書に載せられ、そこに新たに序説「隋唐帝国の本源について——中国中世の国家と共同体」が加えられて、氏の「共同体論」を知る上で最も注目すべき論稿となっている。本書には氏の貴族制に関する精神史的側面からの一連の研究は載録されていないが、政治過程の論及のうちにその精神史的課題が明らかにされ、抑えられた筆致のなかにも氏独自の